

地域的な視点を基調とした民間の集団的実践への接近

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
巻/号	342
掲載ページ	p. 143-146
発行年月	2015年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



地域的な視点を基調とした民間の集団的実践への接近

Locally-based Approach for Collective Practices by Private Sectors

渡部 陽介*

Yosuke WATANABE

1 はじめに

農村計画学会では、学会設立当初から現在に至るまで研究と計画・実践との接点が重視されてきたと考えられる。国・都道府県・市区町村・集落といった様々なスケールの計画・実践の現場と密接に関わりながら研究が行われてきた。国土形成計画や広域地方計画への提言活動に代表されるように、蓄積された実践的知見に基づき、政策や計画に対する提言も活発になされてきた。さらに、東日本大震災や福島第一原発事故を契機に、研究と計画・実践のさらなる緊密化が目指されているようにも思われる。学会誌の紙面を見ても、被災地の生活・産業・コミュニティの再建の現場に密接に関わった経験に基づく研究成果が急速に蓄積されている。震災復興という文脈以外でも、毎号の特集企画と連動して、実践者によって執筆された活動の報告が増加している。

研究と計画・実践との関係の緊密化が志向される背景には、様々な動機が考えられる。「社会のための科学」¹⁾への転換や「認識科学と設計科学の連携の促進」²⁾といった日本の学術分野全体の動向も外的な動機のひとつだと考えられる。しかし、より直接的には、深刻化・複雑化する農山村地域の課題に対して、農村計画学として実践的な知の蓄積・共有と活用の促進が急務であるとの内的な動機が大きいと考える。

しかし、緊密化に向けては課題も多く、決して簡単ではないのも事実ではないだろうか。緊密化以前に、計画・実践の現場との関係構築の方法について、個々の研究者毎に試行錯誤が重ねられる一方、その経験やノウハウが必ずしも体系化・共有化されているわけではないと考えられる。また、緊密化の基盤として、地域外の主体である研究者が、実践が展開される地域の自然・社会特性や履歴、規範・価値観、課題等に対して理解を深める過程が不可欠である。研究実施という点では、従来の普遍性・客観性を重視とした研究に加え、現場との深い関わりを

前提とした研究の枠組みも議論される必要がある。研究成果の活用という面では、学術の発展に資する知と現場の課題解決に役立つ知では、そのあり方が異なる場合も想定される。

今後、計画・実践との緊密化を見据え、現場との深い関わりの中で、どのように研究を行っていくか。本稿では、限られた経験ではあるものの、筆者のこれまでの研究を踏まえつつ、上記の問いを考えてみたい。

2 地域的な視点を基調とした民間の集団的実践への接近

議論に先立ち、研究・計画・実践という3領域の関係性を再考するという本特集の問題提起に基づき、筆者がこれまで行ってきた研究の位置付けと、基本的な視座を確認してみたい。

結論から言えば、筆者のこれまでの研究は、研究と実践の境界領域にて、両者の接点を模索してきたと認識している。とりわけ、「地域的な視点」を重視して、「民間の集団的実践」への接近を一貫して試みてきた。

大学院在籍中（修士・博士課程）は、地域アイデンティティという地域固有の価値観からみた景観評価を主題として、地域住民の日常的生活・生業の実践への接近を試みてきた³⁾。この他、文化的景観の保全・活用に関する研究^{4) 5)}や、地域景観資源を活かした住民組織主導のプロジェクト（福島県会津若松市）にも携わってきた。

ポストク期間中は、コミュニティガーデンという住民組織によるローカルな公共空間づくりの実践への接近を試みてきた⁶⁾。具体的には、社会実験を重視した研究プロジェクトの一環として、住民組織が主導する運営・維持管理活動に実験スタッフとして日常的・継続的に参加しつつ、その可能性や課題に関する調査に取り組んだ。

そして民間建設会社の研究所に所属している現在、自然環境アセスメントや環境配慮等、建設事業を契機とした地域環境の保全・創造に関する計画技術・対策技術の

* 清水建設株式会社技術研究所 Shimizu Corporation Institute of Technology

Keywords: 1) 地域的な視点, 2) 民間, 3) 集団的実践

研究開発に取り組んでいる。

民間で展開される様々な集団の実践への接近を試みる中で、筆者が特に重視してきたのが「地域的な視点」である。実践は、ある特定の地域において展開されるものであり、生活・生業、コミュニティ活動、民間事業で程度は違えども、自然条件・社会条件、土地の履歴といった多様な地域の文脈に規定される営為である。地域が抱える課題やその解決手段やプロセスも異なってくる。民間による実践に関して深い理解を得るためには、理想的には、課題発見・仮説構築、調査・解析、考察、結論、提言といった研究の一連のプロセスに地域的な視点が反映されていることが重要であると認識している。

3 民間による実践への参加を通じた現場での学び

民間の実践と深く関わりながら研究を行っていくための基盤として、現場で展開されている実践への参加を通じた、現場での学びが非常に重要だと考える。

一般に、地域外の主体である研究者にとって、実践が展開されている地域の自然・社会特性や履歴、規範・価値観、課題等は自明ではなく、地域的な視点に関する理解は乏しいものと考えられる。行政資料や農林業センサス、郷土史、学術論文等、公開されている既存の文献資料から得られる情報は地域を概括的に理解する上では有用であるものの、地域的な視点に対する理解を深めるには限界がある。そもそも、民間の実践に関する資料は、公的な計画や事業と比べ、必ずしも文書として作成・保管されているわけではない。ゆえに、文書化されていない資料を含め、実際に現場に行ってはじめて得られる情報が、地域的な視点の理解には不可欠である。

ところで、現場で得られる情報というだけなら、実践へ参加しなくても良いのではないかとの意見もあるかもしれない。もちろん、アンケート調査やヒアリング調査、観察調査といった現地調査を通じて把握される情報も多い。現地調査という研究手法やそれを通じて取得される情報は、今後、ますます重要になると考えられる。

しかし、筆者が、実践への参加を通じた学びに着目する理由は、地域的な視点というものが、研究という枠組みに留まらず、実践の中での具体的な身体的行為や語り、感覚等の集団的な共有を通じて理解される必要があるとの考えによる。例えば、実践の現場で得られる情報は、実践者との関係性の熟度によって変わってくるという側面がある。すなわち、参加当初は表面的・一般的なコミュニケーションしか行えなかったものが、実践への参加を重ね、研究者の地域に対する理解や実践者との関係が深まっていくにつれて、人名や地名、出来事を具体化したより深いコミュニケーションができるようになると思

えられる。

また、実践の現場は静的な状態を保っているわけではない。日々、発生する様々な課題・ニーズに柔軟に対応しながら、取り組みが行われている。住民組織主導のコミュニティガーデンづくりでも、地域の課題・ニーズに応じて、空間・運営・利用を柔軟に対応させ、公共空間としての性質が動的に変化しながら取り組みが行われていることが把握された。現場における課題・ニーズへの対処や意思決定の様子から、地域的な視点を学んでいくことができると考えられる。現場の変化は、継続的に参加してはじめて認識できるようになるものと考えられる。

4 地域的な視点を基調とした研究枠組みの構築

民間による実践への参加を通じた学びを重ねる中で、普遍的な視点に加えて、より地域的な視点を基調とした研究枠組みの構築が必要であると強く認識するようになった。

こうした認識を持つに至った直接的な契機になったのは、地域住民の日常的な生活・生業の実践へ接近し、地域アイデンティティの観点から景観を評価してきた試みである。この試みを通じて徐々に明らかになってきたのは、不特定多数の普遍的な視点と、特定の地域における様々な実践の経験に基づき形成される地域的な視点の間には、少なからずギャップが存在するという事実である。すなわち、審美的・快適性といった普遍的な視点から積極的に評価されない景観であっても、地域アイデンティティという地域的な視点からは重要な景観として認識される可能性があることが示唆された。さらに、あまりにも身近で日常的な存在であるため、普段は地域の人々の意識にもほらさず、特定の行事・季節等と結びつくことでのみ価値や意味が確認される景観の存在も把握されてきた。

こうした事実を踏まえ、地域的な視点に対する理解が深まっていない段階で、研究者が研究対象を事前を選択し、質問紙を用いて景観の評価を把握するという従来の手法には限界があると考えようになった。より根源的には、従来の景観評価の前提とされた、評価主体と評価対象を明確に分離するという主客二元論の発想自体を再考する必要があると考えようになった。

普遍性・客観性を重視し、評価主体が客体である評価対象と深い関わりを持たないという前提⁷⁾では、地域的な視点の反映は、限定的にならざるをえない。主客二元論の発想に基づく景観評価に対しては、これまで、人文主義的地理学や風土論の立場からも、様々な実践を通じて経験される景観の価値を捉えきれていないといった趣

旨の批判が数多くなされてきた^{8)・9)・10)}。地域的な視点を基調とするためには、地域における実践を通じた評価主体と評価対象の密接な関わりを前提とした、主客不分離の発想が重要だと考えられる。

上記の課題・批判に応える試みのひとつとして、景観研究の範疇ではあるが、筆者は、地域的な視点を基調とした研究枠組みを模索してきた。具体的には、「住環境を共有する者同士が集団で語り合い」という手法に基づき、地域的な視点から価値を認められる景観やそれとの関わりを把握を試みてきた。集団の語り合いに着目した理由としては、1) 経験や知識、感情など景観と主体の関係を詳細に把握することができること、2) 主体が自ら評価対象や評価軸を自由に選択できること、3) 参加者同士が相互に影響を与えながら、集団で共有される経験や知識に関する語りが共同で生成されていく¹¹⁾ため、普段、意識に上ってこないような景観の想起が促されやすい状況であること、の3点が挙げられる。

「住環境を共有する者同士の語り合い」という発想は、哲学の分野の木岡¹²⁾や環境心理学の分野の呉¹³⁾等、語り合いやそこで用いられる言葉から景観を捉えた人文社会科学分野の知見から着想を得ている。木岡¹²⁾は、ある地域の集団に共有される「原風景」が、「住環境を共有する者同士の語り合い」という集団的な言語行為を通じて意識化されると述べている。また、呉(2004)も、「原風景を共同で語るということは、同じ地域の場所・空間・風景と関係する多様な人、遊び、出来事が交わりながら、共同でストーリーを構成し、そして共有認識し、共同で評価し、意味づけていく、語り合うその場での協同の物語生成作業であると考えられる」と述べ、共同での語り合いの重要性を指摘している。両者とも語り合いという集団的な行為に注目しているとともに、語り合いの過程や語り合いの場そのものにも意義を見出している点に特徴がある。

上記のような研究の枠組みのもと、従来の景観研究で見過ごされてきた景観—審美性・快適性の観点から積極的に評価されない景観—の存在を示すとともに、景観と主体の多様な関わり的一端を示すことができたと考えている。ゆえに、まだまだ課題も多いものの、地域的な視点を基調とした研究枠組みの構築という試みは、部分的に検討することができたものと考えられる。

5 地域的課題に対する研究成果の還元

実践の現場との緊密化を前提とした場合には、研究が貢献を求められるのは、学術研究の発展や、政策的課題の解決といった領域に留まらない。個々の地域で展開されている民間の実践を巡る地域的課題への貢献について

も積極的に取り組んでいくことが重要だと考えられる。そうすることで、研究側にとっては、研究成果を実践へ適用する際の課題や適用範囲を現場で検証し、改良を重ねていくことが可能となる。一方、実践側にとっても、研究成果の一部を計画・実践のモニタリングに活用し、進捗状況や課題を見直すことができる。

しかし、学術の発展に資する研究成果と、現場の課題解決に役立つ知では、そのあり方が異なる可能性も十分想定される。例えば、学術論文は、研究者間のコミュニケーションを前提に、学術研究の発展へ貢献することを目的に執筆されるものである。普遍性や客観性、再現性、一般性が重視されるため、研究成果やそれに基づく提言も、学術的課題や政策的課題を対象としたものが中心となる。その一方、地域固有の課題の扱いは限定的にならざるをえない。また、学術論文は、学会誌である研究者を対象とした学会誌や論文集に掲載されているため、オンラインで閲覧可能ではあるが、基本的には、現場の実践者が目にすることは少ないと思われる。

現場への還元という点では、実践者向けに改めて研究成果をまとめ直し、報告・提言する機会を作ることが重要だと考えられる。これまで筆者が取り組んできた研究成果は、現場で活用しやすいよう、報告書や地図という形式で現場へ還元してきた。例えば、景観に関する研究成果は、語り合いの結果を、景観資源の分布図とともに、逐語録の一部を地図に対応づける形で取りまとめた。幸いなことに、一部の地域では、研究成果の一部を地域資源ガイド作成の検討資料として活用して頂けた。

取りまとめに際しては、学術研究という枠組みでは扱うことが難しかった、地域性や主観性、個別性が大きいデータについても積極的に盛り込むこととした。これは、地域的な視点が強く反映されることで、現場が進捗状況や課題の見直しを行うためのモニタリング資料として役立てやすくなるとの認識による。

6 まとめ

以上、限られた経験ではあるものの、地域的な視点を基調として民間の集団的実践への接近を試みてきた筆者の研究を紹介しつつ、研究と実践の関係を中心について論じてきた。本稿の内容は、筆者自身も試行錯誤を重ねている段階であり、今後も継続して議論を深めていきたい。

以下、本稿では十分に論じることができなかった研究と実践の緊密化に向けた課題に簡単に触れておきたい。

まず、「3 民間による実践への参加を通じた現場での学び」で論じたように、現場との関係構築と現場での学びこそ、緊密化の成否を決める重要な基盤である。本

学会には、設立当初より、計画・実践の現場で培ってきた、現場と関わる経験・ノウハウが膨大に蓄積されているものと考えられる。しかし、現状では、そうした経験・ノウハウは、個々の研究者の内に秘められている部分が多いように思われる。今後、計画・実践の現場との緊密化を進めていくためには、暗黙知を含め、現場と関わる経験・ノウハウを体系化・共有化していくことが重要だと考えられる。その上で、農村計画学の基盤技術として学生や若手研究者、技術者へ伝えていくことが望まれる。

次に、どのような主体の計画・実践と緊密化を図っていくかも、重要な論点だと考えられる。これまで、本学会において現場で関わる実践者と言えば、行政や、農家を基軸としたコミュニティが中心であったものと考えられる。しかし、農山村地域の計画・実践を巡るステークホルダーが多様化する中、地域内部には非農家や、Uターン・Iターンが増加する一方、地域外部の都市住民や他出者、民間企業等の関与も増えてきている。多様なステークホルダーを前提とした研究も進展してきているものの、民間企業の実践に着目した研究は、まだまだ少ないと考えている。農業ビジネスや再生可能エネルギー、農山村観光等への関心の高まりを背景に、地域外の民間企業による実践が、農山村地域においても改めて活発化してきている。今後は、民間企業の実践との連携についても重要な視点になってくるものと考えられる。

最後に、研究の普遍性・客観性と、計画・実践との緊密化や、地域的な視点との関係は、さらなる議論が必要だと考えられる。本特集の企画者が指摘するように、「計画・実践との密な関係性を志向すればするほど、「科学的」な研究から遠ざかってしまうというジレンマ」が存在する。こうしたジレンマが生じる背景には、研究とその対象を巡り、以下のような基本的な認識が前提にあるものと考えられる。すなわち、科学的であるためには、対象となる事象の客観的な調査・分析に徹する必要がある。その際、研究対象との接触は、研究結果に影響があるた

め排除しなくてはならない。しかし、計画・実践との緊密化を図っていく上では、研究対象との接触を避けるどころか、個別的な現場とのより積極的な関わりが求められる。普遍性・客観性が重視される研究において、実践的な研究は、どのように位置づけられるのか。実践的な研究の積み重ねとともに、実践的研究の理論的な基盤の構築が重要だと考えられる。

引用文献

- 1) 日本学術会議 (2007)：提言：知の統合—社会のための科学に向けて—, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t34-2.pdf>, 2007年3月22日, 2015年7月20日閲覧.
- 2) 日本学術会議 (2003)：新しい学術の体系—社会のための学術と文理の融合—, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/18pdf/1829.pdf>, 2003年6月24日, 2015年7月20日閲覧.
- 3) 渡部陽介 (2012)：地域アイデンティティとしての農村景観の認識構造に関する研究, 東京大学学位請求論文.
- 4) 横張真・渡部陽介 (2009)：農山村における文化的景観の動態保全, ランドスケープ研究, 73 (1), 10-13.
- 5) 横張真・渡部陽介 (2011)：ランドスケープ計画の視点からみた板倉の文化的景観, 利根川・渡良瀬川合流域に形成された水場景観保存計画, 板倉町教育委員会, 165-172.
- 6) 渡部陽介・宮本万理子・雨宮護・寺田徹・横張真 (2014)：カシワ制度に基づくコミュニティガーデンにおける公共性の変化, ランドスケープ研究 77 (5), 713-718.
- 7) 篠原修 (1977)：景観体験と景観の操作, 土木工学体系編集委員会 (編)「土木工学体系 13 景観論」, 彰国社, 33-126.
- 8) レルフ, E. (1999)：場所の現象学—没場所性を越えて, 筑摩書房.
- 9) ベルク, A. (1992)：風土の日本—自然と文化の通態, 筑摩書房.
- 10) トゥアン, YE. (2008)：トポフィリア—人間と環境, 筑摩書房.
- 11) 呉宣児 (2001)：語りから見る原風景, 萌文社.
- 12) 木岡伸夫 (2007)：風景の論理—沈黙から語りへ, 世界思想社.

Keywords: 1) Locally-based approach, 2) collective practices, 3) private sectors